

科目担当者氏名		科目担当者連絡先 (メールアドレス)	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩渕 亜希子		
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩渕 亜希子	追手門学院大学	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査実習ⅡA	OTMa-100702-2	20	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：学生が果たした役割：学内調査という所与の条件のもとでの仮説立案・調査票作成、エディティングおよびデータ入力、集計票の作成、分析、執筆。感想：本実習では、実習全体の調査枠組みのもとで、学生が自らの関心を互いに表明し、それを活かしてグループごとのテーマと仮説をまとめあげ、それに沿った調査を行えることを重視しているが、グループワークのマネジメントには困難が多い。

II. 調査の企画・設計 (デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：2クラス計35名で計4テーマを設定し1つの調査票を作成した。(複数のテーマにわたる関心を持つ場合は、複数のグループに所属した場合もある。) 以下に「恋愛(浮気の基準)」グループの概要について述べる。
2. 調査の内容/概要：恋愛において何が・どこから「浮気」にあたる行為なのかについて、行動によって示される男女間の親密さにはある種の段階があると仮定して測定・分析した。また浮気を判定する基準の差異が何によって生み出されるのかを検討した。
3. 調査の範囲/対象(量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：母集団：追手門学院大学の社会学部生1~3年生 計452名、サンプリング：全数調査(1~3年ゼミ29クラスを通じた配布・回収)、標本数：452名
4. 主な調査項目：浮気の基準(複数の男女間の行為にたいして、自分の恋人がその行為を行った場合浮気とみなすかどうか)。過去の恋愛経験。交友関係。恋愛情報(口コミ、文字媒体、映像媒体)への接触度。

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集(現地調査)の方法：1~3年生ゼミの担当教員に対し、受講生自らが調査依頼の交渉を行った。日程調整のうえ、受講生が分担して調査員となり、ゼミを訪問しての調査説明、配布、回収を行った。したがって、自記式、集合調査である(ただし、一部回収箱を利用した留置法を併用)。
6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査時期：2010年6月下旬~7月上旬、調査地：追手門学院大学内、調査員の数：学生計35名(うちAクラス20名)
7. 収集したデータの量と質への評価(量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入)：総配布数353、有効回収数：328、配布数に対する有効回収率：92.9%(昨年度より向上)

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：SPSSを用いた統計解析(クロス表分析とカイ2乗検定、平均値の差の検定、相関分析が中心)
9. 調査の成果(調査から得られた主な知見など)：実際の恋愛経験だけでなく、口コミや雑誌・ドラマ等を通じた恋愛情報への接触が多いほど、多様なケースを知ることを通じて浮気に対して寛容になる、という事前の仮説はことごとく覆された。現実はいさむしろ逆である。また、通常は男性の方が浮気の基準はゆるいが、浮気の経験がある人に限ると、男女差は見られないことがわかった。
10. 報告書刊行の予定と概要：2011年3月に『2010年度 社会調査実習報告書』刊行。Aクラスからは、恋愛(浮気の基準)に関する論文8本を掲載。

<記入上の注意点> 1. 調査のテーマ毎に用紙を替えて(3つのテーマを立てて実施した場合は合計3枚に渡って)ご記入下さい。

2. 最上部の*印の箇所には数字を(*/*)には、報告書が複数枚になる場合のみ、3枚中の1枚目なら1/3とご記入下さい。

3. 全ての項目について具体的にご記入下さい。但し、1テーマ毎に印刷が必ずA4サイズ1枚に収まるようにして下さい。フォントサイズは変えず(設定してある通り)にして、項目毎に分量に応じて「行の高さ」を変えることで調整していただけたら幸いです。

4. 報告書はウェブ上で公開する予定です。また、調査実習情報をDB化することも検討しています。ご承知置きの上、ご記入下さい。

2010年度開講科目

調査実習概要報告書

4/12

2011年4月27日

科目担当者氏名		科目担当者連絡先 (メールアドレス)	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩渕 亜希子		
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩渕 亜希子	追手門学院大学	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査実習ⅡA	OTMa-100702-2	20	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：学生が果たした役割：学内調査という所与の条件のもとでの仮説立案・調査票作成、エディティングおよびデータ入力、集計票の作成、分析、執筆。感想：本実習では、実習全体の調査枠組みのもとで、学生が自らの関心を互いに表明し、それを活かしてグループごとのテーマと仮説をまとめあげ、それに沿った調査を行えることを重視しているが、グループワークのマネジメントには困難が多い。

II. 調査の企画・設計 (デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：2クラス計35名で計4テーマを設定し1つの調査票を作成した。(複数のテーマにわたる関心を持つ場合は、複数のグループに所属した場合もある。)以下に「家族(家庭環境の恋愛への影響)」グループの概要について述べる。

2. 調査の内容/概要：家庭環境(親の子への関与の仕方)が恋愛という家庭環境とは異なる生活領域にどう影響しうるのか

3. 調査の範囲/対象(量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：母集団：追手門学院大学の社会学部生1~3年生 計452名、サンプリング：全数調査(1~3年ゼミ29クラスを通じた配布・回収)、標本数：452名

4. 主な調査項目：家庭での親の態度・行動パターン、本人の異性との接し方、本人の恋人への接し方

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集(現地調査)の方法：1~3年生ゼミの担当教員に対し、受講生自らが調査依頼の交渉を行った。日程調整のうえ、受講生が分担して調査員となり、ゼミを訪問しての調査説明、配布、回収を行った。したがって、自記式、集合調査である(ただし、一部回収箱を利用した留置法を併用)。

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査時期：2010年6月下旬~7月上旬、調査地：追手門学院大学内、調査員の数：学生計35名(うちAクラス20名)

7. 収集したデータの量と質への評価(量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入)：総配布数353、有効回収数：328、配布数に対する有効回収率：92.9%(昨年度より向上)

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：SPSSを用いた統計解析(クロス表分析とカイ2乗検定、平均値の差の検定、相関分析が中心)

9. 調査の成果(調査から得られた主な知見など)：①性別を問わず、親が人づきあいが得意だからといって恋愛上手になる効果はないが、親が人づきあいが苦手だと子も異性とのかわりかかわりが苦手になる傾向がみられた、②男性(息子)よりも女性(娘)の方が、家庭と恋愛とで親と同様の行動パターンをとる傾向が強い

10. 報告書刊行の予定と概要：2011年3月に『2010年度 社会調査実習報告書』刊行。Aクラスからは、家族に関する論文5本を掲載。

<記入上の注意点> 1. 調査のテーマ毎に用紙を替えて(3つのテーマを立てて実施した場合は合計3枚に渡って)ご記入下さい。

2. 最上部の*印の箇所には数字を[*/*]には、報告書が複数枚になる場合のみ、3枚中の1枚目なら1/3とご記入下さい。

3. 全ての項目について具体的にご記入下さい。但し、1テーマ毎に印刷が必ずA4サイズ1枚に収まるようにして下さい。フォントサイズは変えず(設定してある通り)にして、項目毎に分量に応じて「行の高さ」を変えることで調整していただけたら幸いです。

4. 報告書はウェブ上で公開する予定です。また、調査実習情報をDB化することも検討しています。ご承知置きの上、ご記入下さい。

2010年度開講科目

調査実習概要報告書

6/12

2011年4月27日

科目担当者氏名		科目担当者連絡先 (メールアドレス)	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩淵 亜希子		
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩淵 亜希子	追手門学院大学	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査実習ⅡA	OTMa-100702-2	20	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：学生が果たした役割：学内調査という所与の条件のもとでの仮説立案・調査票作成、エディティングおよびデータ入力、集計票の作成、分析、執筆。感想：本実習では、実習全体の調査枠組みのもとで、学生が自らの関心を互いに表明し、それを活かしてグループごとのテーマと仮説をまとめあげ、それに沿った調査を行えることを重視しているが、グループワークのマネジメントには困難が多い。

II. 調査の企画・設計 (デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：2クラス計35名で計4テーマを設定し1つの調査票を作成した。(複数のテーマにわたる関心を持つ場合は、複数のグループに所属した場合もある。)以下に「友人関係(男女間の友情)」グループの概要について述べる。
2. 調査の内容/概要：異性間の友情はなりたつのか、という問いにアプローチするため、「異性間の友情を大切にしているのはどのような人か」を分析した。
3. 調査の範囲/対象(量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：母集団：追手門学院大学の社会学部生1～3年生 計452名、サンプリング：全数調査(1～3年ゼミ29クラスを通じた配布・回収)、標本数：452名
4. 主な調査項目：男女間の友情への肯定意識、異性の友人への恋愛感情、友人数、異性の友人との接触頻度

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集(現地調査)の方法：1～3年生ゼミの担当教員に対し、受講生自らが調査依頼の交渉を行った。日程調整のうえ、受講生が分担して調査員となり、ゼミを訪問しての調査説明、配布、回収を行った。したがって、自記式、集合調査である(ただし、一部回収箱を利用した留置法を併用)。
6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査時期：2010年6月下旬～7月上旬、調査地：追手門学院大学内、調査員の数：学生計35名(うちAクラス20名)
7. 収集したデータの量と質への評価(量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入)：総配布数353、有効回収数：328、配布数に対する有効回収率：92.9%(昨年度より向上)

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：SPSSを用いた統計解析(クロス表分析とカイ2乗検定、平均値の差の検定、相関分析が中心)
9. 調査の成果(調査から得られた主な知見など)：①異性に対して「下心」があっても、友情はありうると考える人が多い、②異性とよく接する人ほど、友情はありうると考える人が多い、③友人だった異性に恋愛感情を抱いたことがある人ほど、友情はありうると考える人が多い。総じて「恋愛関係に陥ってしまいやすい人ほど、友情など成り立たないと思う」のではなく、逆に「友情は成り立つと思うほど異性と親しくなれる人が、異性の友人との恋愛関係に陥る」と考えられる。
10. 報告書刊行の予定と概要：2011年3月に『2010年度 社会調査実習報告書』刊行。Aクラスからは、友人関係に関する論文5本を掲載。

- <記入上の注意点>
1. 調査のテーマ毎に用紙を替えて(3つのテーマを立てて実施した場合は合計3枚に渡って)ご記入下さい。
 2. 最上部の*印の箇所には数字を(*/*)には、報告書が複数枚になる場合のみ、3枚中の1枚目なら1/3とご記入下さい。
 3. 全ての項目について具体的にご記入下さい。但し、1テーマ毎に印刷が必ずA4サイズ1枚に収まるようにして下さい。フォントサイズは変えず(設定してある通りにして)、項目毎に分量に応じて「行の高さ」を変えることで調整していただけたら幸いです。
 4. 報告書はウェブ上で公開する予定です。また、調査実習情報をDB化することも検討しています。ご承知置きの上、ご記入下さい。